

# この本を薦めます

学会誌編集委員長 佐々木 葉

第6回



## 藤野 陽三

東京大学 特任教授

今回は土木学会百周年にむけた事業を推進する「100周年事業実行委員会」委員長の藤野陽三先生に、研究・大学・社会を考えるための本をご紹介します。

### 地

球物理を目指しつつ構造物の世界に入り、橋の振動を中心に幅広い研究を国際的に展開する藤野先生は、研究組織と人の育成、社会への貢献にいかに取り組みかについても真正面から考えつづけてこられた。まずは敬愛する梅棹忠夫先生から。ご存命ならば100周年記念式典の講演者にもっともふさわしい方とおっしゃる。『文明の生態史観』を筆頭に多

数あるなかから『研究経営論』を選ばれた。国立民族学博物館館長の就任講話をはじめとして、組織や共同での学術研究推進に関する明快な考えがつけられている。今でこそ研究組織や評価方法が重視されているが、1970年代にその具体を示して実践した梅棹氏の論は、ご自身の研究体制を考える上で非常に刺激になったと言われる。次いで1965年に朝永振一郎先生

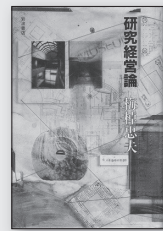


FUJINO Yozo

1949年生まれ。東京大学特任教授。楽しみながらの研究、オープンでフラットな気持ちで内外のエンジニア、研究者と接することをモットーとして行動。趣味はテニスと橋の絵を描くこと。

と一緒にノーベル物理学賞を受賞したファイマンさん。学生時代にこの人の有名な赤い教科書で物理を勉強した藤野先生は、若い人を育てる情熱が強く、また典型的なアメリカ的学者としても大好きとおっしゃる。多くの本の中から今回は、スペースシャトル・チャレンジャー号の事故調査委員会に参加した時の『ファイマン氏、ワシントンに行く』（『困ります、ファイマンさん』に収録）に注目。事故の科学的要因に迫るとともに、社会的要因、つまり大統領演説の日にむりやり発射させるという決定や巨大組織の問題も、物理学者として包み隠さず世に伝えていく姿勢は痛快だ。原発はじめ事故論としても示唆に富む。

最後は社会心理学者の山岸俊男氏の『リスクに背を向ける日本人』。安全や信頼といった土木でも重要な課題に対して社会という観点から要する。心理実験という裏付けを持つ点も理系人間には共感でき、安全・安心な日本というイメージが定着しているが、社会構造としては日本社会はリスクが高く、だから若者もチャレンジしない、といったことが説かれていく。社会と個人の行動の関係を考えるなど、悩み多き現代社会に向き合うための1冊として、ここでは対談形式の読みやすいものをご紹介します。エネルギーシユな藤野先生らしく、3冊以外にもあれこれとひと抱えの御本をお持ちいただいた。本屋めぐりをする時間がないので『波』や『本』など出版社発行の小冊子や新聞の書評から読みたい本をチェックされるとか。幅広い著名知識人との交流も先生の好奇心の広がり源と拝察した。



### 研究経営論

梅棹忠夫：  
岩波書店(あるいは梅棹忠夫著作集 第22巻、中央公論社に所収)1989年



### 困ります、ファイマンさん

R.P. ファインマン：  
岩波書店



### リスクに背を向ける日本人

山岸俊男＋メアリー・C / プリントン：  
講談社現代新書